

<「70年」と「30年」によせて>

この夏、テレビ放送では二つの特集番組が多く組まれました。一つは言うまでもなく「戦後70年」関連であり、もう一つは「日航機墜落30年」関連番組です。

「戦後70年」関連番組では従軍看護婦を扱ったドキュメンタリーやドラマに関心を持ちました。「女性に赤紙がきた唯一の例」ということを初めて知りました。いくつかの従軍看護婦番組を見ながら、「黎明高校看護科や衛生看護科の生徒にこれを教材に誰か授業をしてくれないかな。」と思っていたところ鈴木紫乃先生が102と101で取り組まれていました。まずは心からの拍手をおくります。安保関連法案をめぐる多くの反対意見や疑問が出されていますが、戦争状態になれば兵士と共に前線で活動せざるをえないのが看護師だからです。かつて軍医が「負傷兵を再び前線に送り返すための治療とはなんなのか？」と心で問うていたということを知ったことがあります。従軍看護婦はどんな気持ちで看護に当たっていたのか？彼女たちの証言にひかれました。

様々な証言の中で私の心に一番残ったもの、それは授業中に鈴木先生があげたものと同じでした。

自分が看護した患者さんと偶然再会した時に「お世話になりました。」と言われました。(涙声になりながら)「私は恥ずかしかった。治療なんてできていなかったんですから。」

撤退の足手まといになるからと、静脈に空気を注射して「処理」することを命令された看護婦、命を守るどころか奪う側に立たされ、人の死に無感覚になっていった、等々。人の命を守る・救う仕事に志をたて進んだ道が、全くその志と逆のことをせざるをえなかった彼女たちの苦悩はいかばかりだったろうと思います。

こうした従軍看護婦の姿と対照的だったのは、日航機墜落現場近くで4名の生存者の緊急措置と、520名の遺体処理に携わった看護婦達でした。人としての形をとどめている遺体はほとんどなく、頭皮や腹部だけで身元確認に立ち会った看護婦達の献身的な働きは、山崎豊子『沈まぬ太陽』に詳しく描写されています。身元確認に来た家族の気持ちを考え、骨が砕けてへこんだ身体に綿などをつめてなるべく生前の面影を再現しようとした看護婦達。番組ではそうしたつらい作業に関わっていた一人の看護婦が確認に来た「夫と思われる遺族」のエピソードを涙ながらに語りました。

腹部しかない遺体を見てその男性は「私の妻です。」と言われました。でも腹部しかないので再度確認すると「この帝王切開の傷後は妻に間違いありません。」と言われました。おなかだけで奥さんと確認できる夫婦の絆ってすごいと思いました。

人の命に関わる看護婦(看護師)の二つの関連番組を見て、命への関わり方がこんなにも違うのかと考えさせられました。それが「70年」と「30年」の違い、戦争と平和の違いなのかと思いました。一所懸命学習に励む看護系の生徒達が、志に灯した火のとおり命を大切にできる仕事ができる未来であってほしいと祈らざるをえません。

「戦争のことはよく分からない。」という声に、問いを引き出し、考える戦後70年企画の授業に今後も期待します。

